

お話を伺いました

株式会社さがみこファーム  
代表取締役社長  
山川 勇一郎さん

## さがみこベリーガーデン

2023年6月グランドオープン。農地で農作物とエネルギーを同時生産する「営農型太陽光発電」を神奈川県相模原市で初めて実現。36種類約1,100本のブルーベリーの摘み取りが楽しめる会員制農園。摘み取り・食べ放題のほか、食育・自然体験・エネルギー体験を通じてSDGsを学ぶ機会も提供する。

さがみこ  
ベリーガーデン地域共生型ソーラーシェアリングでつくり出す  
食とエネルギーと新たな地域の価値

2021(令和3)年度の日本の発電電力量の構成を見ると、再生可能エネルギーの発電量は全体の20.3%を占めており、再生可能エネルギーの国内供給は9年連続で増加しています。なかでも太陽光発電は前年度に比べ8.9%増とバイオマス発電に次いで大きく伸長<sup>(※1)</sup>。しかし国内で発電に適した土地は年々減少し、今後の普及は容易ではありません。そのような状況下で、農地の上部空間に設備を設置し、農業と太陽光発電で農地を共有する「ソーラーシェアリング(営農型太陽光発電)」の取組促進が、2020(令和2)年の食料・農業・農村基本計画に位置づけられました。

コミュニケーションを  
積み重ね 地域から  
信頼される存在に

神奈川県相模原市でソーラーシェアリングに取り組む「さがみこファーム」では、中山間地域<sup>(※2)</sup>で耕作放棄地となっていた7000平米の農地を利用してソーラーパネルを設置し、ブルーベリーを栽培しています。代表取締役社長の山川勇一郎さんが目指すのは、耕作放棄地の農地利用、食とエネルギーの地域生産、地域での多様な雇用の創出、農業の6次産業化など様々な価値を生み出す「地域共生型」のソーラーシェアリング。農地の地権者や地域の理解を得ながら準備を進め、2023(令和5)年6月にいよいよ会員制の

体験農園「さがみこベリーガーデン」をグランドオープンしました。

広い畑の上にソーラーパネルがずらりと並ぶ風景は、それまでの農業や農地のイメージとは大きく異なるため、最初は抵抗のある地権者も多かったと言います。山川さんは、太陽光発電のメリットはもちろん、農作物の光合成に必要な太陽光を確保

地域で電気をつくり出す  
ソーラーシェアリング

農地の上部空間に設置したソーラーパネルにより地面への日射量を調整し、太陽光を農業生産と発電とで共有する取り組み。農地法に基づく一時転用許可により、農地に支柱を立て設備を設置することができます。

できるソーラーパネルの設置法や、ソーラーシェアリングに適した農作物があること、使われていない農地活用により地域へのメリットがあることなどを、地権者や地域に対して丁寧に説明しながら関係性を築き、信頼を積み重ねてきました。

「この地域で私たちは、よそ者でしたが、畑に通って草刈りしながら挨拶を交わしたり、一緒にお茶を飲んだりするうちに、少しずつ受け

入れてもらえるようになりました。こうして関係性を築いていくことが地域共生の基本なのだと思います」と山川さん。地元の自治会と非常時の電源供給について協定を結んだり、地域の小中学校の環境学習や職場体験の場として子どもたちを受け入れたりするなど関わりを増やしていき、さがみこファームは徐々に地域の役に立つ場としても認知されるようになりました。またブルーベリーの栽培や収穫などは、地域の高齢者や子育て中の方、障がい者施設の利用者など地域の方々がその仕事を担っています。

「その地域で成り立つ事業の姿を見せることは、地域にとって価値の再発見であり希望にもなると思います。農業という事業は、たくさん雇用の生み出すこととはなかなか難しいのですが、多様な雇用を生み出すことはできるので、様々な地域の方に関わってもらっています。さがみこファームを一つのモデルケースとし、今後は会員企業などと協働しながら近隣地域などにも、地域共生型のソーラーシェアリングを広げていきたい」と山川さんは語りました。

環境やエネルギー問題、地域課題を考えるきっかけにも  
「さがみこベリーガーデン」の会員制度

さがみこファームが営む会員制農園「さがみこベリーガーデン」では、ブルーベリーの摘み取りのほか、野草クッキングやはちみつ搾り、キノコ狩りなど、自然環境を活かした会員向けのイベントを多数開催しています。また、ソーラーシェアリングの仕組みやさがみこファームの取り組みを伝えるスタディツアーも開催。学校や企業、団体などの研修や一般の視察を受け入れています。会員は個人や企業・団体向けに4つのプランが設けられた年会員のほか、1日だけ利用できるワンデー会員もあります。

詳しくは  
HPへ